業 界 短 信

（２０年７月１日～７月 31 日）

松田商工、６KWレーザが稼働（鉄鋼新聞、７／２）

㈱松田商工（千葉県浦安市、松田学社長）は、レーザ加工能力を増強した。最新鋭の６KW発振器を搭載した大型レーザが、６月下旬の浦安第２工場で稼働した。板厚２０ミリ超の厚物領域を安定的に高品位切断する。２０年を経過したプラズマは板厚１２ミリを超えると、品質・生産性が低下したことにくわえ、ヒューム対策にも苦慮していた。同社では最大２８ミリまでを対象に、薄中物から厚物まで、幅広くレーザ加工を手掛けていく。また、レーザ導入に先駆けて、能力６００トンの折り曲げ加工機が稼働しており、一次加工（切断）から二次加工（曲げ）までの一貫体制を拡充した。

日鉄神鋼シャーリング、在庫管理を効率化（鉄鋼新聞、７／３）

㈱日鉄振興シャーリング（大阪市此花区、木村秀明社長）は、母ザイ倉庫を構築し、在庫管理の効率化、構内搬送の自動化システムを構築する。増築する母材倉庫の建築面積は 1250 平方メートル、既存の在庫スペースは工場棟内の 1800 平方メートルで、約７０%増の 3050 平方メートルに広がる。８月に着工し、今年度中の完成を予定している。同社は切る板出荷量が年間約４万トン、主な用途は橋梁約 55%、鉄骨３５%、造船その他 10%。厚板の母材在庫は常時２０００~２５００トン。

共同シャーリング、レーザ導入を検討（産業新聞、７／１０）

㈱共同シャーリング（青森県八戸市、高峯左一社長）は、４KWレーザの導

入を検討する。老朽化したプラズマと来年に入れ替える予定。小ロットで短納期の加工ニーズが多く、6-12 ミリ熱いを安定して高速で切断する必要があるため。効率的な加工設備を整えることで品質と納期対応を高める方針。同社は小ロ・多納期の加工を得意とし、プラズマ５基を揃え、月間赤穂量は約 350 トン。２５ミリ厚、広幅の公判を加工できるより、高速のレーザを同ん優したい意向。6 ミリ圧の公判を４倍のスピードで切断するなど生産性を大幅に向上させる。。

河合シャーリング、レーザ５基に増設（産業新聞　７／１０）

河合シャーリング㈱（大垣市野口、河合進社長）は、本社工場にレーザ１基を増設し、５基体制を構築した。６月から本格稼働を開始。加工能力が３０％程度向上し需要家の短納期ニーズなどへの安定的な対応能力が強化された。電気設備を含めた投資総額は約９０００万円。同社は産業機械、工作機械、自動車向けなどの鋼板加工を主力とする。本社及び第２工場を持ち、従来の保有設備はレーザ４基、プラズマ１基、ＮＣガス３基、シャーリングマシン２基など。月間加工量は約１３００トン。向け先比率は機械関係 70%、土木関連 30%。２４時間稼働可能なレーザ増設により、操業の無人化比率を拡大する。

有川シヤリング工業、厚板穴あけ設備増強（産業新聞、７／１４）

有川シヤリング工業㈱（浜松市、有川京司郎社長）は、ショットブラストマシン１基を更新、バリとり設備１基を新設し７月から稼働を開始した。穴開け加工工程の設備拡充により厚板切板のトータル加工効率を高め、需要家ニーズへの対応力を強化。投資額は約２０００万円。同社は、建築鉄骨製作業者や産業機械部品製作業者等に対する鋼板販売や、厚板を中心とした鋼板切断、曲げ、穴あけ、開先、ショットなどの加工のほか、製缶業務も手掛けており、直近の月間生産量は約７５０トン。ここ５年間、ユーザーからの納期短縮化ニーズの高まりに対応し、ガス３基、シャーリングマシン１基の更新、レーザ１基の増

設など切断工程の効率化、高精度化を進めてきた。さらに近年は、二次加工ニーズも増加してきたことから、穴あけ用ドリルマシンの増設も実施している。

青柳鋼材興業、ホイール向け切板加工拡大（鉄鋼新聞、７／１８）

青柳鋼材興業㈱（千葉県船橋市、高橋雅雄社長）は、自動用や建設機械用のタイヤホイールの受注量が漸増していることから、今秋中にも矯正用のプレス機を増設する。現在は浦安工場に矯正プレス１台を保有しているが、今回船橋に最新鋭プレス機を導入し矯正能力増強を図る。橋梁向けが主体だが、ここ数年でタイヤホイール向けの切板加工も主たる柱となった。当初は年産１０００トン程度であったが、今はその数倍まで伸びている。点数も月間２万枚近くを生産している。同社は２拠点体制で、建材、産業機械、一般店売り向けに切板加工と材料販売を合わせて年間約３万数千トンを扱う。

太陽シャーリング、６月加工量、初の５０００トン台（鉄鋼新聞、７／１８）

太陽シャーリング㈱（広島市江波南、浅利重法社長）は、０８年６月の切板加工量が単月で初めて５０００トン台に達した。これまで過去最高の４９４０トンを上回る５０１９トンの記録は単一シャー工場としては全国的にも高水準。主力の造船向けにくわえ、産業機械、橋梁と各分野からの受注が好調推移し、目下フル操業中。生産量は月間４５００トン台が常態化しており、７月以降も月間４８００トン台を維持する模様。加工量増大に対しては全工程を通じた設備稼働率向上策が生産性向上に結び付いている。